

「他と協働し、自らくらしを創造する子供の育成」(3年次)
～対話を通して学び、納得感を追究する姿を目指して～

1. これまでの経緯

本校ではこれまで、子供の実態から「表現力」や「問題発見力・情報活用力」、「批判的思考力」等を伸ばしていくことを教育課題として捉えてきた。これらの力を伸ばすことで、子供が自らの思考・判断に基づいて物事を捉えることができ、その結果として「自らのくらしを、自らの手で創り出していくことができるのではないか」と考えた。そこで令和3年度、「自らくらしを創造する子供の育成」を研究主題として設定した。具体的にはまず、「くらしを創造する子供」に必要な資質・能力を設定した。次に、それらの資質・能力が表れている「具体的な子供の姿」をイメージし、その実現に向けた授業づくりを行うことで主題に迫ってきた。令和4年度の実践を通して、以下のような成果(○)と課題(△)が見えてきた。

○学校教育目標を基に、子供達に付けたい教科横断的な資質・能力を明確且つ一体的に捉え、整理することができた。

○単元内自由進度学習や『学び合い』による個別学習等、子供が「納得感」を得ることができるような手立てをそれぞれの教師が意識的に実践し、成果や課題を追究するようになった。

△相手の考えを「受け止める」ことができる子供は増えてきたが、その考えをそのまま「受け入れる」児童も多い。

→教師自身が「受け止める」と「受け入れる」ことを明確に区別し、「たしかに～という考えもあるね。→(だけど…) (他には…)」と多面的・多角的な視点で物事を捉え、批判的に検討することのできる子供の育成を図っていきたい。

△子供の興味・関心、生活経験などを把握し、子供の暮らしや社会の文脈に沿ったオーセンティックな課題を視野に入れた教材研究を徹底する必要がある。

→教師自身が「ワクワク感」を感じるかどうかを授業作りの大きな視点として捉える必要性。

2. 研究主題

学校教育目標および上記の成果と課題を踏まえ、本年度も「他と協働し、自らくらしを創造する子供の育成～対話を通して学び納得感を追究する姿を目指して～」を研究主題として設定する。本主題について、本校は以下のような前提に立つ。

他と協働して

これからの社会においては、多様な人々と力を合わせ持続可能な社会を創りあげていくことが必要である。授業でも友達や教師、地域の方々などあらゆる他者と共に学ぶことが大切である。このように他者と協働・協力的に学ぶ中で、自分や他者の存在を相互に承認しあったり、新たな価値に気付

いたりすることができるようにしていきたい。

自ら

児童観の根本として「子供は本来、自ら学ぶ力をもっている」存在であるという認識をもつ。困難な課題が立ちはだかったとしても子供達を信じ、子供達の力を引き出すために何が出来るかを問い続けていきたい。

くらしを創造する子供

Society5.0以降の社会において、子供達は持続可能な社会を形成する主体者である。既存の概念や価値観に囚われず、自らの生活や地域、国、世界に生きる人々のくらし等がより良いものとなるよう思考・判断し、行動していくことが求められる。自分自身を様々な社会事象・課題と結び付けて多様性を受け入れ、力を合わせながら、新たな社会、新しい価値観を作り出したりしてほしい。このような将来の姿をイメージしながら、「今」を生きる子供達に関わっていきたい。

【対話を通して納得感を追究する姿】

「くらしを創造する」ためには、対話することが大切である。それらの対話は「自分—他者」や「自分—もの」、「自分—自分」等、多様である。しかし、どのような対話の形であっても、情報を一方的に受け取るだけでは深い学びとはならない。「納得感」をもつまで(=腑に落ちるまで)粘り強く、繰り返し対話しながら自分の考えを深めていくことを大切にしたい。

【ことばの教室における本研究の捉え】

くらしを創造する子供

ことばと心を育むことを基本に据える。主たる課題の解決と共に、コミュニケーション力や思考力などことばを巡る子供のくらしが豊かになるようにしていきたい。

自ら

学びの主体を子供に置く。子供が夢中になって取り組む活動の中に学びを盛り込んでいきたい。

他と協同して

一人の指導者との関わりを通して、他との協働の初歩を体験的に学べるようにしたい。

3 学校教育目標との関連

本校の学校教育目標は「他と協働し、自らくらしを創造する子供の育成」であり、目指す子供像を「自ら学びをつくる子供」「思いや繋がりを大切にし、共に伸びる子供」「健康でたくましくしなやかに生きる子供」と設定している。本研究は学校教育目標との一体化を図り、授業を通して「他と協働し、自らくらしを創造する子供の育成」を図ることを目的としている。具体的には、学校教育目標を踏まえた「目指す子供像」に迫るために、付けたい「資質・能力」と「資質・能力を発揮しながら納得感を追究する子供の姿」を明らかにし、授業改善を図ろうとするものである。令和4年度2月の研究全体会（研究の総括）で、6年生の時点で付けたい「資質・能力」およびそれらの「資質・能力をはつきしながら納得感を追究する子供の姿」を改めて次のように整理した（図1）。

【学校教育目標】他と協働し、自らくらしを創造する子供の育成

【研究主題】他と協働し、自らくらしを想像する子供の育成 ～対話を通して納得感を追究する姿を目指して～

【目指す子ども像と、津山小学校6年間の教育課程で育みたい資質・能力】

*卒業時に身につけている資質・能力をイメージして作成

	自ら学びを創る子供	つながりを大切にし共に伸びる子供	健康でたくましくしなやかに生きる子供
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> □1 場面や状況、背景等と合わせて具体的な課題設定の仕方が分かる。(課題発見) □2 人やモノ、情報を効果的に活かしながら課題解決に向かうことの大切さを理解している。(課題解決) □3 言葉を適切に用いて表現することの大切さを理解している。(言語能力) 	<ul style="list-style-type: none"> □1 仲間や教師等、他者と対話を通して関わり合いながら学ぶことが、自己の考えを広げたり深めたりするのに有用であることを理解している。(協働性) □2 仲間と力を合わせて生活・学習していくためには、集団で合意形成したルールやモラルを尊重することが大切であることを理解している。(社会性) 	<ul style="list-style-type: none"> □1 どのように失敗や困難を乗り越えたのを客観的に捉えることが自己の成長に繋がることを理解している。(メタ認知) □2 多様な考え方や価値観の存在を尊重し、認め合うことの大切さを理解している。(多様性の尊重)
思考力、判断力、表現力等	<ul style="list-style-type: none"> □1 対象となる事象から課題を設定し、解決への見通しや手順を明確にする。(課題設定) □2 観点に沿って情報を収集・整理する。(情報収集・情報活用) □3 目的にそって整理分析することによって自己の考えを形成する。(整理・分析) □4 多様な方法で自分の考え・想いを確かにし、自分の意図に沿って表現する。(表現) 	<ul style="list-style-type: none"> □1 身に付けたソーシャルスキルや話し合いの仕方を使いながら、より良い関係を築こうとしている。(協調性) □2 自分の考えを伝える相手の背景や状況等を踏まえて表現し、伝えようとしている。(相手意識) 	<ul style="list-style-type: none"> □1 生活や学習等、様々な場面で自分を律しながら、その場に適した行動、言動を選択している。(社会性・言語能力) □2 学習・健康等に関わる自己の状況を正しく捉え、自分にあった課題ややり方を選ぼうとしている。(自己理解)
学びに向かう力、人間性	<ul style="list-style-type: none"> □1 課題解決を通して自己の成長を楽しみ、学習の意欲に結び付ける。(自己効力感) □2 自己の学習状況等を踏まえて課題を設定し、最後までやり抜こうとする。(粘り強さ) □3 より良い考えを追究しようとする。(批判思考) 	<ul style="list-style-type: none"> □1 一人では解決困難な課題に対して、仲間や教師等と力を合わせて解決しようとしている。(協働性) □3 相手の困り感や課題は何か、相手の立場に寄り添って考えようとする。(他者理解) 	<ul style="list-style-type: none"> □1 自分の将来の夢や目標を思い描き、その実現に向けて自分の可能性を伸ばそうとしている。(キャリア形成) □2 他者の多様な考え方や価値観の存在を尊重し、受け止めようとしている。(多様性の尊重)

【授業において、資質・能力を発揮しながら納得感を追究する主な子供の姿】

友達や自分の考えについて**多面的・多角的・批判的**に検討することで粘り強く考え、自己の考えを形成していく姿

友達や教師、材等と**対話的に関わり合う**ことを通して、自分の考えを広めたり深めたりする姿

多様な考えに触れたり、失敗や困難を乗り越えたりしながら、より良い「自分」や「解決方法」等を目指そうとする姿

図 1. 学校教育目標と校内研究の関連

4. 研究方法

(1) 本研究のロードマップ

1年次では、授業研究会を通して見えた子供の実態を基に「自らくらしを創造する子供」について具体的な子供の姿を明確にした。2年次では、「自らくらしを創造する子供」の具体的な姿を基に3つの視点を設定して授業づくりを行なってきた。3年次となる本年度は、昨年度末の成果と課題を踏まえて「授業づくりの3つの視点」の捉え方を見直した。これらの視点で授業を実践し、成果や課題を明らかにすることで「他と協働し、自らくらしを創造する子供」を育成するための授業のあり方をより明確にしていきたい。

(2) 研究の進め方

本研究は、①「くらしを創造する子供」を育成するための資質・能力を明らかにした上で、②単元の内容や子供の実態に応じて育成する資質・能力をより具体化し、③「授業づくりの3つの視点」を設定して授業作り・実践を行い、④実践を通して見えた子供の姿を基に成果と課題を検証することで、「他と協働し、自らくらしを創造する子供」の育成のための授業のあり方を明らかにしていくものである。

【授業づくりの3つの視点】

① 子供が学ぶ必要感を感じることができる（子供の心に火が付く）授業づくり

「子供の生活や実社会の文脈に即した課題設定」や「子供と共に行う課題設定」を大切にす
る。「子供の心に火が付く」かどうかを吟味する前に、教師自身が「面白い」と思える材である
かどうかも大切にする。

例) 学習指導要領を基にした教材研究、材の吟味、日常生活に関連した課題設定、
学習環境の整備、課題提示の工夫 等

② 粘り強く学習に取り組み、納得感をもつことができる授業づくり

友達や教師、材との対話的な関わりを大切にする。子供の実態やねらいに応じて単元内自由
進度学習や『学び合い』を取り入れ、子供が自己調整しながら納得がいくまで粘り強く学ぶこ
とができるような支援を行っていく（学びの個別化、個性化）。この前提となるのがファシリテ
ーション（相互作用し合う関係）である。教師と子供、子供と子供が信頼し合い、安心して自
己開示できる関係が土台とならない限り、学びの個性化や個別化は実現されない。

例) マイプラン学習、単元内自由進度学習、『学び合い』、ICT 機器の活用 等

③ 自己の成長を意識することのできる授業づくり

振り返りを通して自己の変容を自覚し、学びに向かう力を高めていくことを大切にする。例
えば、失敗や困難が「マイナスなもの」ではなく、「自分の成長の糧となるもの」という認識
を教師と子供で共有する。失敗や困難を乗り越えたタイミングを教師はすかさずキャッチし、
子供の言葉で成功の要因を言語化させる等の工夫が必要である。

例) 単元前の自己アセスメント、単元末の振り返りの工夫、ポートフォリオの活用 等
これらの視点で授業づくりを行い、子供の姿を基に授業改善を図っていく。

【ことばの教室における授業作りの3つの視点】

① 子供が学ぶ必要感を感じることができる授業づくり

<子供が自分らしさを受け止められる場で、主体的に学んでいる授業づくり>

- ・ 共感的な関係がある。ありのままを受け止められ、気持ちが汲み取られ、安心感が持てる。
 - ・ 発信を大切にされることや学習への見通しが持てることにより、自分事として取り組める。
- ※必要感を前提とする学び以外に、楽しく取り組むうちに目標が定まり理解が後追いすること、
できたことが使える技能として定着する過程で自信が育まれていくことも含めて学びとと
らえる。

②粘り強く学習に取り組み、納得感をもつことができる授業づくり

<子供ができてきている実感が持て、関わりを楽しみながら活動に取り組んでいる授業づくり>

- ・スモールステップや意図的な働きかけによって技能の習得や対話が無理なく行われている。
- ・できた経験をたくさんでき、諦めずに取り組み、最後はやり遂げた満足感を味わえる。
- ・選べる場面、自らの発想・工夫が生きる自由度がある活動などで、関わりながら学んでいる。

※初めは人からの働きかけによって躊躇う気持ちが解され、関わってみた経験が核になって、自分を開いて他と協同して学びを進められるようになっていくととらえる。

③自己の成長を意識することができる授業づくり

- ・技術の習得、認識の明確化、不安の軽減、自信の増大など、学習の過程で成長を自覚できる。
- ・対話によって思考を広げ、深められる。

※良好な関係性の中で、心に響く適時適切な言葉がけをさりげなく細やかにしていくことで、子供が自覚的に、また無自覚にも成長していくととらえる。

(3)「評価」の捉え方

育成したい資質・能力（単元の目標）に対する評価基準を明確にもつようにする。評価の方法はテストなどの数的情報に偏ることなく、多様な方法で評価することができるようにする。

主な評価の対象		評価方法
質的情報	クラスや個の育ちが分かる子供目線・教師目線のエピソード	行動観察、成果物等
数的情報	学習の定着率、クラスの統計的な情報	テスト、アンケート等

これらの評価を「子供の育ち」と捉えると共に、授業づくりの評価としても捉え、手立ての成果や課題を検証する材料としていく。

5. 授業改善にむけて

- 日常的に授業づくりについて語り合うことができるように「教材研究タイム」を設定する。
- 授業作りの土台として「ファシリテーション*1」を大切にし、研修の機会を取り入れていく。

*参考：中央教育審議会(2021)「令和の日本型学校教育の構築を目指して」

- 「学級づくり」や「授業づくり」などについて専門的な見地から指導・助言をいただく。

【主な講師】 山形市立西山形小学校 教頭 高野 浩男 先生
天童市教育委員会 指導主事 海鋒 和裕 先生
山形大学附属小学校 教諭 佐藤 大将 先生

6. 研究組織

【研究推進委員会】 校長、教頭、教務、研究部所属職員

【研究部】 ◎二戸部（全体統括）、○後藤（研究会および教材研究タイムの運営）、
東海林（庶務全般）、佐藤薫（庶務全般）

7. 本年度の研究計画

(1) 授業研究会の持ち方について

授業研究会は「大規模授業研究会」の規模で全員が行うものとする。

「ことばの教室」はすべて小規模研究会で実施する。事前研究会は以下のグループごとに行う。

グループ	メンバー
A 低学年部	◎1年担任、2年担任、たんぽぽ担任、(教頭)
B 中学年部	3年担任、◎4年担任、もみじ担任、(後藤)
C 高学年部	◎5年担任、6年担任、教務、(二戸部)
D ことば	◎林、言語通級指導教員

*◎はグループのリーダー

【研究会の基本的な進め方】

- ① 4月初めに、6月～12月の間のどの時期に授業を公開するか決定する。
- ② 授業予定日の 1か月前にグループリーダーが招集をかけて集まり、授業づくりの検討を行う。
- ③ 2週間前までに指導案の原案を作成し、グループメンバーおよび研究主任に提出する。
- ④ 修正した指導案を 1週間前までに研究主任に提出する(校長・教頭への提出は研究主任が行う)。
- ⑤ グループリーダーが招集して2回目の検討会を行う(内容は自由とする)。
- ⑥ 全員が授業および事後研究会に参加する。事後研修会の記録はホワイトボードを用いて行う。子供の姿から、本時にどのような学びが創られていたのか等を中心に話す。ホワイトボードの記録は写真に撮影し、研究の記録として保存する。
- ⑦ 授業研究会終了後、事後研修のホワイトボードの記録と共に、総括を添えて「事後研究会のまとめ」を発行する。製作者はグループ内で順番を決めて作成する。

(2) 研究紀要の作成について

本年度の研究の成果や課題などを明らかにするために研究紀要を発行する。研究紀要の主な項目は「授業研究会の指導案」「事後研究会のまとめ」「くらしを創造する子供の姿について(A4版1枚程度にクラスの実践をまとめる)」とする。12月の研究全体会で製作手順を提案する。

(3) 研究に関わる主な日程

日付	項目	主な内容	
4月4日	月	研究全体会①	研究概要の確認
5月31日	水	第1回校内全体授業研究会(5年外国語)	授業を通じた研修
6月7日	水	研究全体会②(1年国語)	新学期前半の実践の振り返り
6月23日	金	第2回校内全体授業研究会(1年国語)	授業を通じた研修
7月5日	水	第3回校内全体授業研究会(3年算数)	授業を通じた研修
7月28日	金	・学級経営研修会① ・研究全体会③ ・事前検討会	・授業の土台となる学級経営について学ぶ ・1学期の実践の振り返り ・公開研究会の授業について検討する
8月23日	水	研究全体会④	教材研究およびアクションプランの確認等
10月11日	水	公開授業研究会	授業を通じた研修 低中高の学年部より1名ずつ・言語通級
10月16日	月	研究全体会⑤	授業を振り返り、2学期後半の重点を考える
11~12月		学年部で「授業を見合う会」	期間内に一人1回ずつ実施(教頭・教務含)
12月25日	月	・学級経営研修会② ・研究全体会⑥	・授業の土台となる学級経営について学ぶ ・2学期の実践の振り返り
1月9日	火	研究全体会⑦	教材研究およびアクションプランの確認等
1~2月	月	「授業を見合う会」	期間内に一人1回ずつ実施(教頭・教務含)
2月16日	金	研究全体会⑧	今年度の研究の総括
2月28日	水	研究全体会⑨	次年度の研究について(提案)
3月1日	金	研究紀要の原稿締め切り	
3月15日	水	研究紀要の製本完了	
3月20日	月	研究紀要の配付・発送	

* 言語通級指導に関わる研修会については、Dグループ内で日程を調整し、小規模研修会を実施する。

* 特別支援学級の授業研修については、2学期中に日程を調整して実施する。